

言葉の魔力、意味の深淵

八戸工業高等専門学校 総合科学教育科 教授 高橋 要

言葉は、人を生かしも殺しもする。その一言で友情が芽生え、恋人が去って行く。それなのに言葉に刃はなく、ただ意味だけがある。そして、意味の底は深く、容易に見えない。その名の通り言語学は、言葉を解体して意味を見極め、文学は意味を決めつけず言葉をありのままに見つめて来た。また現代の哲学は、言葉の分析によってのみ思想は解き明かされると説く。言葉と意味の探究は、人間の、その人生の探究に等しい。



ウィトゲンシュタイン評伝 若き日のルートヴィヒ 1889-1921

ブライアン・マクギネス

訳：藤本隆志、今井道夫、宇都宮輝夫、高橋要

「コペルニクス的転回」の真似をして「言語的転回」と呼ばれている 20 世紀初頭の哲学の動向は、それまでの 意識や観念という人間の内面の分析 から 言語という公共的なものの分析 により哲学の問題を解決しようとするものでした。その端緒になったのがウィトゲンシュタインで、この人の書くものには難しい言葉は出て来ませんし、読んで分からないということもありません。だからこそ適切な道案内人と一緒に読まなければ、まるで見当外れな解釈をしてしまいます。そういう人が身近にいない場合は、まず最初に伝記を読むのがいいかもしれません。



心という難問 空間・身体・意味

野矢 茂樹

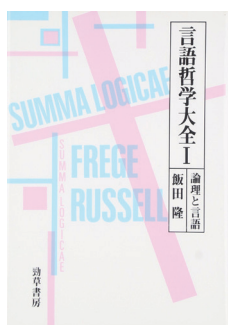
本当は、同じ著者の『語りえぬものを語る』（講談社）を挙げたかったのですが、新刊本が手に入らないようです。私の知る限りウィトゲンシュタインの最良の道案内人です。そればかりではなく、ウィトゲンシュタインの思想はどんな射程を持っているのかを如実に示してくれます。著者の「相貌論」の現在の到達点を述べたのが本書で、ウィトゲンシュタインはこんなに遠くまで届くのかという感動を教えてください。



ことばと対象

W・V・O・クワイン

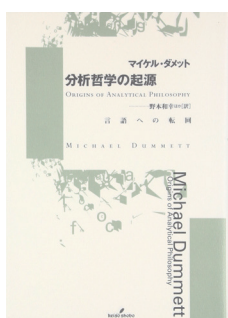
ウィトゲンシュタインやその流れを組む大陸欧州人たちとは一線を画する基盤から、言葉というものの本性を徹底的に見つめ直した著作です。常識的で伝統的な言語観を厳密な論証で次々と覆して行き、爽快感を得られます。しかしながら、大変難解です。



言語哲学大全 I - IV

飯田 隆

『ことばと対象』を開いてみて「ダメだ、こりゃ」と思った方には、野本和幸／山田友幸（編）『言語哲学を学ぶ人のために』（世界思想社）をお薦めしたい。しかし、残念ながら現在手に入らないようですので、こちらを試してみてもいいかもしれません。言語哲学の全貌が掴めます。

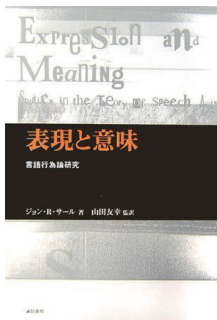


分析哲学の起源 言語への転回

マイケル・ダメット

訳：野本和幸、高橋要、岡本賢吾、長沼淳

『言語哲学大全』などという 4 巻もある大部は無理だという方には、この本は手頃です。元々の始まりを知れば、現在の状況は何となく想像がつくものです。しかも、この本は元は一般の人向けの講演の原稿でしたから、読みやすさは訳者の保証付きです。



表現と意味 言語行為論研究

ジョン・R・サール
監訳：山田友幸／訳：高橋要、野村恭史、三好潤一郎

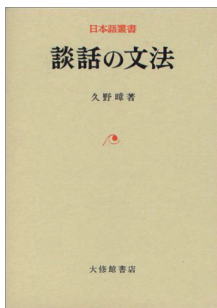
「約束します」という言葉は、それを言っただけで、あるいは書いただけで約束したことになります。逆に「約束します」と言わないではっきりと約束することは難しい。このような「言うことがそのまま行為となっている」ということを初めて明確に述べたのは、J・L・オースティンという人でした。「それがどうした」と思われた方は、この本を読めば、この言語行為論がどれだけのことを成し遂げられるかが分かるでしょう。



認知意味論 言語から見た人間の心

ジョージ・レイコフ

言語とその意味を認知構造と概念体系として捉える。つまり、言葉とそれが担う意味は、我々の心とカテゴリーとからなるモデルだと言う。これだけで興味を惹かれた方は、是非ともこの大著に挑戦していただきたい。現代の言語学における意味の研究の広さと深さが実感されるでしょう。



談話の文法

久野 暉

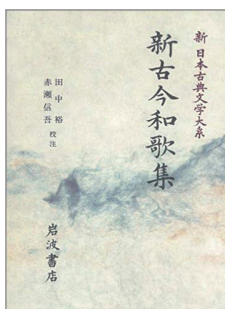
この著者は、有名な「は」と「が」の違いなど、我々が無意識に使っている日本語の意味をくっきりと際立たせてくれます。『日本文法研究』と『新・日本文法研究』（共に大修館書店）も合わせて読みたい。いずれも、論文とはこういうふうを書くものだというお手本のような叙述になっています。



唐詩三百首 1-3

編：蘅塘退士
訳注：目加田 誠

詩歌には言葉の持つ多様な意味が凝縮されています。特に形の決まっている定型詩にその傾向が強い。研究書から離れて自分の頭と感性だけを頼りに言葉を見つめる、それが言葉と意味の探究の原点なのかも知れません。膨大にある漢詩のアンソロジーとして、これに勝るものはないと信じています。



新古今和歌集

校注：田中 裕、赤瀬 信吾

これはコメント不要でしょう。頂点を極めた短歌の豊穡な海にたゆたうだけで、言葉も意味も溶けて血肉となっていきます。

八戸工業高等専門学校
総合科学教育科 教授

高橋 要

北海道生まれの北海道育ち、生粋の道産子。八戸高専が初任地で、それ以来ずっと八戸に住んでいるので、今はもう八戸っ子。専門は言語哲学、と言っても様々な言語哲学があるうちで、分析哲学と呼ばれている現代英米系の哲学です。記号論理学を武器に言語（主に英語）の文法構造や意味構造を分析して哲学上の問題を解く、というのが基本ですが、言語使用者や発話状況を含めた語用論の観点から隠喩の分析まで手を伸ばしています。



ハブブックセンター
HACHINOHE BOOK CENTER

〒031-0033 青森県八戸市六日町 16-2 Garden Terrace 1F
TEL 0178-20-8368 FAX 0178-20-8218 web <https://8book.jp/>